

シンポジウム

「人をコンテンツにする創造的な地域づくり」

基調講演 「人をコンテンツにする創造的な地域づくり～徳島県神山町の地域づくりの取り組み～」

大南信也氏（NPO 法人グリーンバレー理事長）

パネルディスカッション 「外部人材の活用と創造的地域づくりの可能性」

パネリスト 松島貞治氏（長野県泰阜村村長）

原和男氏（和歌山県那智勝浦町色川地域振興推進委員会会長）

石國佳壽子氏（島根県邑南町地域おこし協力隊・アグリ女子）

コメンテーター 黍嶋久好氏（愛知大学）

コーディネーター 岩崎正弥氏（愛知大学）

日 時：2015 年 2 月 16 日（月）

場 所：愛知大学豊橋校舎

今年度の人材育成部門事業として、上記のテーマによるシンポジウムを開催した。人口減少下の越境地域政策を考察する上で、移住・定住を初めとする人材流動による地域の活性化が重要になっている。しかしながら、昨今の議論は人口の自然増減・社会増減という定量的な側面ばかりがクローズアップされ、どのような人材を誘致するのかという人口の質的な側面への視点が希薄である。そこで本シンポジウムでは「人口の質」に焦点を当て、「人をコンテンツにする」というテーマでのシンポジウムを設定した。このフレーズは、すでに徳島県神山町で創造的地域づくりを実践している NPO 法人グリーンバレーが掲げている目標であり、今回はその概念を借用してシンポジウム全体のテーマとした。基調講演には同 NPO 法人理事長の大南信也氏をお招きした。「地方創生」が叫ばれる今日、大南氏は「ふるさとづくり有識者会議」（内閣官房）、「地域イノベーション有識者懇談会委員」（総務省）などを歴任され、今や「時の人」として全国各地を講演会等で飛び回っている。神山が IT 起業家の誘致で話題を集めたのはわずか数年前であるが、実はすでに 1990 年代初頭より地域づくり活動を実施していることは余り話題にならない。大南氏が強調していたことは、結果ではなくプロセスを参考にして欲しいということであった。「神山モデル」に学ぶとは、多彩な技能を有したクリエイティブ人材の誘致という成果を真似することではない。いかに地域住民の協力者を増やして目標を共有し協働できたのか、その背景やきつ

け・取り組み等を学ぶと共に、人材誘致の仕組みが形成されてきた 20 年余のプロセスを理解した上で、各々の地域特性に応じた適用方法を考えるということだろう。

神山の場合、端緒になったのが 1991 年の「アリス里帰り推進委員会」の発足である。戦前にアメリカから送られた青い目の人形の里帰りを計画し、町民 30 人（うち子ども 10 人）を募りアメリカへ行った。この中の 5 人が現在もグリーンバレーに関わっているという。すなわち「複数の人間が小さな成功体験を共有する」ことから神山の地域づくりが始まったのである。神山は、大南氏を初め、複数の核になる人がそれぞれの得意分野で活躍できる場をもつところに特徴がある。この場合は「アイデアキラー」（アイデアを過去の体験から破壊する人）とは無縁である。「やったらええんちゃう」という場の寛容性、新しい取り組みに対し足を引っ張らず背中を後押しすることの重要性が大南氏から語られた。ワーク・イン・レジデンスやサテライトオフィスなど華々しい成果ばかりがマスメディアで取り上げられるが、その背後にある 20 年余のプロセスから育まれた原則を学び取ることが重要であろう。

基調講演を受けて、パネルディスカッションを行った。「外部人材」を焦点に、首長、地域受け入れ側、移住者、という立場の異なる三者の取り組み・事例の紹介から始まり、外部人材の引き起こす摩擦への対処方法、ミスマッチを避けるための処方箋などを確認し、

最後に今後の展望を話し合った。泰阜村、色川地域、
邑南町と移住・定住に力を入れている三地域であるだ
けに、参考になることが多かったが、ここでは一点だ
け紹介しておこう。外部人材による地域の変化に対し
「(地域が変わってしまって) 寂しい」ともらす人々が
いるとはいえ、「新しい公共」を担っているのは外部
人材だという事実もある。したがって、移住者にはコ
ミュニティの約束事を理解し守ってもらうと同時に、
「土の人(旧住民)」自身も変わらねばならない、両者

が《共に変わる》姿勢をもつところに創造的地域づく
りの一つの核心があるといえる。また人口減少下の「地
方創生」を想定すると、一方での「小さな拠点づくり」、
他方での「(越境する) 広域ネットワーク」が欠かせ
ないことを確認したことも併せて指摘しておきたい。

なお今回のシンポジウム記録は、次年度に改めて何
らかの形で公表したいと考えている。

(文責：岩崎正弥)